

がん化学療法中の学童のための
食生活セルフマネジメント個別支援プログラム

平成 26 年度

広島大学大学院保健学研究科保健学専攻

永田真弓

目次

序章	
I. 背景	…1
II. 目的	…3
III. 意義	…3
IV. 用語の定義	…3
V. 構成	…4
第1章 がん化学療法中の子どもの食生活セルフマネジメント支援に関する研究の動向	
I. はじめに	…5
II. 方法	…5
III. 結果	…7
IV. 考察	…20
V. 小括	…25
第2章 がん化学療法中の子どもの食生活セルフマネジメント支援に関する看護実践 の実態	
I. はじめに	…27
II. 方法	…27
III. 結果	…29
IV. 考察	…43
V. 小括	…50
第3章 がん化学療法中の学童のための食生活セルフマネジメント個別支援プログラム の作成	
I. はじめに	…52
II. 支援プログラムの対象者	…52
III. 支援プログラムの作成	…54
IV. 小括	…67
第4章 がん化学療法中の学童のための食生活セルフマネジメント個別支援プログラム の施行	
I. はじめに	…69
II. 方法	…69
III. 結果	…75
IV. 考察	…92
V. 小括	…96

第5章 がん化学療法中の学童のための食生活セルフマネジメント個別支援プログラム の評価に関するモニター調査	
I. はじめに	…98
II. 方法	…99
III. 結果	…101
IV. 考察	…107
V. 小括	…109
第6章 がん化学療法中の学童のための食生活セルフマネジメント個別支援プログラム の有用性に関する調査	
I. はじめに	…110
II. 方法	…110
III. 結果	…113
IV. 考察	…152
V. 小括	…157
終章	
I. 総括	…160
II. 結論	…164
引用文献	…166
謝辞	…176
資料	
資料1	…177
資料2	…181
資料3	…186
資料4	…187

要旨

長期生存が可能となった小児がんのサバイバーにとって、健康管理は重要であり、中でも食生活管理は発達に関わる課題でもある。そこで、本研究では、がん化学療法下にある入院中の学童に焦点をあて、食生活のセルフマネジメント能力を育成するための、〈がん化学療法中の学童のための食生活セルフマネジメント個別支援プログラム〉を作成することを目的とした。作成するプログラムでは、対象児が医療者からの支援や協力を得ながら、化学療法により影響を受けやすい食生活に関する個別の知識や技術を持ち、栄養状態の維持・改善だけでなく、満足感や QOL の維持・向上に繋がる食事のために自分で目標を設定し、目標達成に意図的に取り組むことを目指した。

がん化学療法中の子どもの食生活とその支援に関する文献と、食生活のセルフマネジメントが必要な慢性疾患の子どものプログラムや健康な子どもの食育に関する文献から、プログラムで展開する支援内容・方法と、その評価を検討した（第 1 章）。その結果、支援の時期は、化学療法の初回クールから約 2 か月間の入院初期からの、状態に応じた継続的な関わりが重要であることを確認した。また、プログラムに含めるべき内容には、症状の苦痛緩和と共に症状に関する基本的知識や技術の提供等があることを確認した。展開には、該当児童が有する疾患や食事パターン等の背景を個別に整理し対応すること、栄養管理の学際的アプローチと協働、知識提供にゲームや ICT を導入すること等が求められおり、評価には、介入前後における子どもの検査値や知識、態度、行動の変化等のプロセス・影響評価が必要であることを確認した。

次に、先行研究から明らかとなったプログラム作成に向けた課題に関して、がん化学療法中の子どもの食生活支援の看護実践の実態を調査した（第 2 章）。その結果、栄養状態の維持・改善等を目的としたツールを用いた定期的な栄養や症状のアセスメント、NST や家族との連携の必要性が示唆された。また、知識提供の方略として、持ち込み食に対応する食育の導入、苦痛緩和のための症状マネジメントに関する生活指導の必要性が示唆された。

これらを基に、プログラムを作成した（第 3 章）。学童期の発達課題を考慮し、「目標設定支援」期ではセルフマネジメントに必要な知識提供を、一般的な食事と栄養のバランスや症状との関係を基本型に、子どもの治療や症状に対応した知識を追加した個別型として、電子版リーフレットにより行う計画とした。子どもが意欲を抱きセルフマネジメントに取り組めるよう、子ども自身が作成する目標設定を「ねらい」として、言語化（文書化）できるよう組み立てた。「目標達成支援」期では、症状等の経過のモニタリングと各状況に必要な知識や技術の提供、医療チーム連携を行い、子どもと家族にポジ

タイプ・フィードバックして、セルフマネジメント実施の達成度を子ども自身が評価できるようにした。

作成したプログラムを、調査協力に同意した T 細胞性急性リンパ性白血病の 9 歳の女子児童と母親に施行した(第 4 章)。化学療法の 1 クールである 1 か月の 1 周期中に、介入を行った第 1 周期(介入期)の後に、経過を観察した第 2 周期(非介入期)の 2 段階で行った。第 1 周期中の取り組みは、学童期の勤勉性という発達課題に適した支援内容・方法であったが、基本型の知識提供により、子どもの食欲亢進症状への対処を引き出すことが示唆された。第 2 周期中の子どもは、消化器症状や発熱等の苦痛が強く、第 1 周期中のような取り組みには至らなかったが、症状改善に伴い第 1 周期中での学習内容を活用しており、食生活セルフマネジメントを継続していたことから、プログラムの有効性が示されたと考える。

認知発達に基づく理解力と実践の関連についてはさらに検討が必要であることから、支援プログラムが学童期の認知発達やヘルスリテラシーに適しているかを明らかにするために、健康学童がモニターとなり、電子版リーフレットの知識提供画面に対する評価を把握した(第 5 章)。その結果、知識提供画面は、健康学童に分かりやすく役立つと評価されていた。なお、評価と発達段階に相関を認められなかったことから、3~6 学年共通の知識提供画面を用いることが可能と考えられた。「より詳しい言葉や絵があるといい」等の画面への具体的な評価からは、よりわかりやすい画面のために、文字情報と関連のある絵の挿入の必要性が示唆される。

当事者側の視点で捉えたプログラムの有用性について示唆を得るために、小児がんのサバイバーと母親が過去の化学療法中の食生活や副作用の体験をもとに、プログラムへの評価について明らかにした。(第 6 章)。プログラムの評価として提案のあった電子版リーフレットの内容がより充実するような追加の記載と、他職種との連携強化により、支援の質を高めていくことが課題であるものの、子どもを中心に知識提供を行い、子どもが設定した目標を達成するための支援方法に電子版リーフレットを活用するという簡便性、当事者による食生活の支援ニーズである退院後の生活を見通した食生活セルフマネジメント支援の内容を備えている点で、その有用性が示唆される。